
一人ぼっち異世界

万里雁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一人ぼっち異世界

【EZコード】

N8675Y

【作者名】

万里雁

【あらすじ】

俺は何も変わらない日常に飽き飽きしていた。

そんな時目の前に現れたのは怪しげな男と2つの門だった。

え？どちらに行くか選べって？

そうして始まる俺の異世界物語。
どうだ、よひしぐー！

プロローグ

そこは白い空と黒い大地だけが世界を埋め尽くす空間。

植物も無ければ動物も居ない、何も動かす只有り続けるだけの静止した空間。

そんな場所を私は居た。

何の為に居るかなんて分からぬ。

何もする事の無い私はこの世界を観察し始めた。

何の為に見続けるのかなんて分からぬ。

それでも私は見続けた。この世界を。

いつたいどれだけの時間が経つたか私には分からない。

何時までも続していくかに思えたこの静止した世界だったが、ある時変化が訪れた。

何処からかは分からぬが、人影が二つ現れたのだ。

今まで何にも変わらなかつたこの世界にやつてきた初めての変化、私はその2人に興味を抱いた。

どうせこのまま変わらない世界を見続けたって意味が無い、

そう思つて私は彼らに近づいてみた。

近づいて見てみると、その2人は1組の男女で両方とも座をしていた。

男の方は酷い傷をしてるようで、女はそれを治療しているようだ。
彼らは何かを話しているようで、私はそのまま会話を耳を傾けてみた。

耳を使うのは何時振りだろうか。

最後に使つたのが何時だったかさえ私には分からなかつた。

それでも耳はちゃんと聞こえているようで、女が必死に謝つている
のが聞こえた。

「いめんなさい。

「めんなさい。

「めんなさい。

「めんなさい。

「めんなさい」

「謝るなって、お前のせこじやなにって言つてんだろ

「で、でもー

私があの時…」

「後悔したって何にもなんねーよ。

お前だつて怪我してるじゃないのか?」

「こんなのがうつて事無い!」

それより、それより
の方が

「もう俺は駄目だ。

俺なんか放つて置いて

は生きろ

「嫌!

が居ない世界なんて私絶対嫌!」

「じめん。

ほんとじめんな。

お前との約束守れそうに無い。

ほんとうに始め

「

「……え?

?

!

あーー！」

その時、男の命が消えた。

初めて見たはずなのに、私には彼の命が消えていったのが分かった。

そのな事を思つていると、男の体が光に包まれ始めた。

男の体を光が完全に包み込むと、男の体はゆっくりと空中に向かって浮かび始めた。

「な、何?

や、やめて！

を連れてかないで！」

女は必死に男の体にしがみついていたが、怪我をしていたせいか途中でその手を離してしまった。

一度地面に落ちた女はそれでも男にしがみつこうとしたが、男の体はすでに彼女の手の届かない高さにまで上がっていた。

男の体はそのままある程度の高さにまで行くと、一際眩しい光を放つて消えていった。

その光景を見た彼女は糸の切れた人形のように崩れ落ち、泣き始めた。

彼女はひたすら泣き続けた。

私はただそれを見続けた。

この世界を見ていた時のようだ。

いつたいどれくらいの時間が経ったのだろうか、彼女は今まで下に向けていた顔をいきなり上げるといきなり叫び始めた。

「神様でも悪魔でも何だっていい！

私の命でも魂でもくれてやる！

だから、お願ひ、彼を返して…」

その女の声は悲しくなるほど痛々しくて、私の心に刺さった。

私に心があるなんて分からぬけれど、何故だかそう思った。

『彼女を救いたい』

それがこの世界に来て初めて私に生まれた意思だった。

でも、私にはどうすれば彼女を救えるのか分からなかつた。

何をすればいいのか分からぬ、とりあえず彼女に近付こうと足を踏み出そうとした。

【彼女を救いたいか？】

頭の中に声が響いた。その声は初めて聞いたはずなのに、どこか懐かしかつた。

【汝に問う。彼女を救いたいか？】

(救いたい！)

【ならば汝は対価に何を支払う？】

そう聞かれて私は何も思い浮かばなかつた。

何かの対価になるようなものなど何一つ持つていなかつたからだ。

【汝は我に何を支払う】

私の事なんてお構い無しに答えを要求してくれる。

何か言わなくちゃ、そう思つた私は彼女がさつき言つた言葉を思い出した。

(わ、私の魂を支払う…)

【了承した】

最後にそう聞こえると、先程の男のように私の体を光が包み始めた。

彼とは違い、私は宙に浮かばずに段々と消えていった。

徐々に消えていく自分の体を見ながら、私はふと彼女の方を見た。

彼女はせつときからずつとじめじめと背を向けて空に向かって叫び続けていた。

そんな姿を見て、私は彼女が可哀想に見えた。

『もう救われるから大丈夫だよ』

どうしてもそう伝えたくて、どうせ聞こえないんだろうと思いつながらも私は彼女にそう話しかけた。

別に返事を期待しなかつたわけではない、でもこれほど近付いてるのに気づかれないんだから彼女には私が分からんんだろうと思つただけだ。

案の定彼女は一いつ見見る事も無くひたすら叫び続けていた。

やがて私を包んでいた光が強くなり始めた。最後が近いんだひとつ。

なんだか頭に靄がかかつたように意識が薄らいでいった。

薄れゆく意識の中で最後に彼女に別れの挨拶をしてみた。

『さよなら』

「え？」

そう言つと、彼女は一いつ瞬振り返った。

私と田代が合つと何かを言つよう口を開けた。

でも、彼女が何かを言つ前に私の視界は闇に塗りつぶされてしまつた。

ああ、最後彼女はなんて言おうとしたのかな。

そう思いながら、私は消えた。

プロローグ（後書き）

始めまして、万里雁です。
誤字、脱字、感想などバンバンお願いします。

あんた誰?
(前書き)

いつから本編スタートです。

あんた誰？

「起立、礼！」

「…………」

（うひしゃー…せつと終わつたぜー…）

委員長の号令によつて俺達はまつ苦しい学校生活から開放された。
何にも無い退屈な日常。

そんな毎日に飽き飽きしつた。
でも明日からは夏休み。

これは否が応いらずテンションが上がりまくるぜ～。

さてさて、どうやって過ごうそっかな～。

なんて考えてみると、クラスメイトの秋山が俺に声を掛けてきた。

「裕也～、この後皆で打ち上げすんだけど、お前どうする～？」

「すまん～、俺この後バイトだわ。また今度誘ってくれや～」

「わつか、じゃあな～」

そつぬうと秋山はクラスの連中の輪に戻つて、また何やら盛り上がりつていた。

（あとと、バイトでも行くかな～）

「お疲れさんでした～」

「おひー！帰り道気を付けるよ」

「いやいや、俺男ですから」

「やうだつたな、わははは」

本当に店長はテンションが高いな。

俺だつて十分テンション高いつて自負してゐるけど、店長のはむりで上を行つてんな。

ま、そのおかげでバイト中も退屈しないけどね。

(んじや、やべへ帰りますかな)

俺は店の近くに止めてあつた愛車サイクリングバイクに颯爽と跨ると、夜の街へと漕ぎ出した。

10分位漕いだだらうか、帰り道の半分くらいまで来ると道の真ん中に見慣れないテントが立つていた。

(おいおい、邪魔だな～。不法投棄か？)

そう思いながらも自転車を止めてテントを良へ見ると、テントの側面に、

『ミスターOの人生占い～』

とででかく書いてあつた。

ミスター口つて何だよ！？

つか、こんな所でやつてたらお巡りさんに怒られるんじゃね？

そんな事思いながら俺の足は自然とテントの方に向かっていった。
昔から好奇心が旺盛だと有名な俺には、このおもしろテントは見過
ごせなかつた。

残つた1パーセントの理性が必死に止めていたが、そんなのを無視
して俺はテントの中へと入つていつた。

(な、何じやこつやー！—)

テントの中へ入つた俺を待つていたのは驚愕の光景だつた。
だって、見た目はそこいら辺にあるテントだったのに、中に入つてみ
るとそこは、

雲の上だつた。

慌てて入つてきた方を振り返つても、そこには何も無くただ永遠と
雲の絨毯が広がつてゐるだけだつた。

(やばい！やばい！これはやばすぎるー！)

俺はらしくも無くテンパツつて、その場をぐるぐる回つ始めた。
だって、携帯も繋がんないんだぜ？
さつきまではバリバリアンテナ3本立つてたのに、いきなり圈外になつてるし。

最終的にはこんな事まで考える始末。

(これつてもしかして俺死んだ? ジリリって天国?)

「いんや、まだ死んぢらんし、ジリは天国なんかじやないよ」

「え?」

いきなり声が聞こえたと思つて振り返ると、さつきまでは誰も居なかつたはずなのにそこには絵本かなんかで出てくる魔法使いが着てそうなローブを着た20代前後の金髪の男が居た。

「おひさん誰?」

「おひさんじゃない。私の名前は……アレックだ、アレック

それって絶対今考えただろ。

この人きつと変な人だな。

でも、今は少しでも情報を集めなくちや。

「じゃ、じゃあ、アレックさん。ジリは何処なんですか?」

「アレックで良いですよ。裕也君は何処だと思ひ?..」

「いや、わかんないから聞いたんすナビ……」

「やうだつたな、ジリは夢と希望の世界ノーリック。お前の前居た世界からすれば異世界つて奴だ。どうだ? ワクワクして来ただろ?..

・・・・・は?..

「だから、『』は夢と希望の

「こや、聞こえなかつたんじやねーかーえ?『』が異世界だつて?マジで言つてんの?」

「おお、マジだ、マジ。どうだワクワクしてきたか?」

「して、一よーといひをと返してくれよー。俺今までの世界で十分ですよ~」

「嘘だろ?」

「え?」

「お前は今までの世界で満足なんつこになかった。違うか?」

「ち、違つ。俺は、ほ、俺は・・・」

「ほら、やつぱつやつだらへやつじやなきや『』の世界には来られねーんだから!」

「『』の世界に来られない?」

「そうだ。『』の世界に来るたつた一つの条件が『今の世界に満足していない』だ。そういう奴等の前だけにあのトントは現れる」

俺の頭の処理速度をまったく無視したまま、アレックはビビン話を進めていく。

「まあ、別に分かんなくたつてこよ。『』でお前が求められるの

はたつた一つだけだ

そう言つとアレックは俺の後ろを指差した。
そこには一つの門があつた。

「あれが元の世界に戻る門。そして、」

アレックが足踏みをすると霊の中からもう一つの門が出てきた。

「これがノーリックに進む門だ」

「ちょっと待て、ここがノーリックじゃないのか？」

「違う、違う。ここはただの分岐点。いきなり連れてつたらさすがに理不尽だから、ここで選ぶの」

「何を

俺が聞くとアレックは、俺の後ろにある門を指差して、

「元の世界に戻るか、」

自分のすぐ横にある門を指差して、

「ノーリックへと進むかを」

「選ぶ? どちらに行くか

「やうだ。別にそのままもとの世界に戻つたっていいんだぜ? そしたら、一度とあのテントはお前の前に現れないから、一生退屈に過

“…」じても、ひづりだけだから

「やつちを選んだら？」

俺はアレックの横の門を指差しながら言つた。

「…」うちを選べば、あなたはノーリックへと旅立つ。そこに行けば、あなたが元の世界では絶対に過ごせなかつたスリルのある充実した人生を送れるでしょうね」

そう言つとアレックは、ダンスを踊るような動きで俺の後ろに回りこむと、俺の耳元で囁いた。

「強制はしません。わあ、お選びください」

俺が振り向くとそこにはもう誰も居なかつた。ここには、俺と2つの門があるだけだつた。

(選ぶ？そんなの最初から決まつてんじゃないか)

俺は真っ直ぐにその門へと近付いた。

「どうかで聞いてんだろ、アレック！俺はこつちを選ぶぜー！」

『本当に良いんですか？』

姿は見えないがアレックの憎たらしげ声はしっかりと聞こえた。
俺はその声に力強くこつ答えた。

「ああ、待つてろノーリック！」

俺は門に飛び込んだ。

これから先何が待ってるかなんてまったく分からぬ。
だけど、絶対に後悔しない人生を送るために。

- - - - -

裕也君が門に飛び込んで数分が経つた頃再び私は“そこ”に降り立つた。

「やつぱり、彼はこちらを選びましたか

(ね?私の言つ通り)

「そうですね。では、見せてもらいましょうか、裕也君。貴方の紡ぐ新しい物語を」

あんた誰？（後書き）

はい、どんな感じだったでしょうか？
誤字、脱字、感想などバンバン受け付けてます。

ギルド

「おひとひと」と

門をくぐるとその先はさつきまで居た雲のいづのよつな場所じゃなく、ビルかのジャングルの木ひばり木々の生い茂る森の中だった。

「ジジがノーリックか」

「セウですよ～、ジジがノーリックですよ～

」「こつは何時もこつたい何処から現れんだよ。

「で、俺はこじで何をすればいいんだ?」

「別に何でも自分のやつたこいつはせんていてただいて結構ですよ～。まあ、とつあえずギルドに登録べりこせしてくだせこ」

「ギルド?」

「ええ、この世界で生きてこくには身分証明書が必要になります。どつかの国の国民として登録するより、ギルドのメンバーとして登録しといた方が色々と便利ですかね～」

「それは何処に行けばできるもんなんだ?」

アレックは何処から取り出したのかは分からぬが、手に持つていた杖をどこに向けた。

「 いっちの方角に一時間ぐらい歩いていけば、ヒーネスという町があるので、そこで登録できるんですよ」

「じゃあ行つていいくすか？」

「待つてください。あんたそんな格好で行つたら、町に入るどころかそのまま捕まっちゃいますよ？」

確かに今の俺の服装は学校からバイトに直接行つたので、学生服のままだ。

「ちょっと田を閉じてね」

俺が目を瞑ると、頭を叩かれた。

目を開けると俺の服装が学生服から、RPGの主人公が着てそうな感じの服に変わっていた。

「 服はサービスで、こっちが本題です。そのギルドってのは、この世界で旅をしたり人助けをしたりする人達の集まりで、まあ詳しい事はギルドに行つたらその人に教えてもらつてください」

アレックはロープの中から手紙を出すと、俺に押し付けてきた。

「それをギルドの人見せれば、簡単にギルドの冒険者登録ぐらいはできますよ。後このバックは、あの青い狸のポケットみたいまでとは言いませんが、ある程度の物までなら詰め込めます。手紙もこの中に入れときますね」

「ありがと、・・・もう行つていい?」

「これで一通り終わりです。行つて構いませんよ」

だつたらサクサク行きますか。

俺は一応アレックに頭を下げると歩きだした。

「ああ、最後にもう一つ。何があつても森の主には近付いちやいけませんからね」

「森の主って何だよ！？」

（変なフラグ立ててくんじゃねー！）

振り向いた先にもうアレックの姿は無かつた。
あいつ最後まで良く分かんない奴だつたな。
森の主が何だかは分からないけど、関わんなきや良いんだろ。
とりあえずウンガネスつて町に向かおう。

それから俺はひたすらひたすら歩き続けた。

アレックが一時間で着くとか言つてたからすぐに着くもんだと思つたら、なんと3時間もかかつた。

アレックは今度会つた時絶対ぶつ飛ばす。

途中で何人かの人ともすれ違つたりしたが、服を着替えていたおかげで特に目立つたりはしなかった。

アレックの言つてた通り学生服みたいな服を着てる奴は居らず、そ

の点についてだけはアレックに感謝した。

そんなこんなでやつとじや着いたヒーネスの街は、とてもなく大きかった。

森の中を歩いている時はどうせ「じんまりとした街だ」と思っていたが、着いてみるとそれはそれは予想のはるか上を行っていた。建物も一つ一つ綺麗でとても過ごしやすそうに思えた。

人の数も尋常じゃなくて、通りの殆どの場所が満員電車のような状態だった。

それでも、ギルドとか言うところに行かなきゃいけないので押しに潰されながら道往く人に聞いてみると一発で分かった。

そして、現在ギルド前に居ます。思った感想は、

(まつづるー)

今まで見てきた建物の中で一番ぼろくて、台風でも来たら跡形も無く吹き飛ばされそうだった。

それでも一縷の望みに懸けて中に入つてみると、中も普通にぼろかつた。

とりあえず受付のお姉さんに登録したいと言つと、名前とか年齢とか住所とか聞かれた。

名前と年齢までは答えられたのだが、最後の住所で俺は固まった。

だって俺何処にも住んでないんだもん。

「今日この世界に来たばつかで何処にも住んできません!」

なんて言えないから途方に暮れてると、段々とお姉さんの俺を見る目が変わってきた。

そんな時俺はアレックの渡して来たあの手紙の事を思い出した。

俺は急いでバックの中から手紙を出すと、お姉さんに押し付けるよ

うに渡した。

お姉さんは最初は胡散臭そうな目で手紙を見ていたが、途中でいきなり目を見開いて手紙を凝視すると奥に引っ込んで行ってしまった。その後10分ぐらい一人で待っていると、お姉さんが帰ってきた。でつかいおっさん連れて。

おっさんは出てくるなり、俺の肩をいきなり掴んで來た。

「さ、君がこの手紙を持ってきたのか？」

「わうですか、どうかしたんですか？」

「どうしたもん! どうしたも無い! アレックは何処に居るんだ!」

「知りませんよ! なんて書いてあつたんですか! ?」

「『俺の弟子が世話になる。面倒よろしく』って書いてあつたんだよーつて事は君は彼の弟子なんだろ? 何処に居るか知らないのか?」

「本当に知りませんつてば! 偶然会つただけですから」

「やうなのか・・・やつと手がかりが掴めたと思ったのに」

「アレックと知り合ったんですか?」

「知り合つても何もあいつは『』のギルドの冒険者だ!」

「えー?」

「それもただの冒険者じゃない、Sクラスの冒険者だ」

「・・・それってすごいの？」

「すごいに決まってるだろ！？Sクラスはこの世界に6人しか居なくて、その実力はたった一人で小さい国なら簡単に潰せるぐらい強いんだぞ！？」

「ええええええ～～～！」

「どうやら俺が知り合ったのは変な人じゃ無くて、
とても強く変な人だったようです。」

ギルド（後書き）

誤字、脱字、感想バンバン受け付けてます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8675y/>

一人ぼっち異世界

2011年11月26日16時51分発行